



(財) 第五福竜丸平和協会

〒136 東京都江東区夢の島3-2
都立・第五福竜丸展示館内
電話 (521) 8494

「十年、一昔」といいますが、十五年前のこととなると、もはや、私たちの記憶から、だいぶ遠去かっています。世界年表をひもとくと、一九七三年の大きい出来事として、ベトナム戦争が終り、パリで、アメリカ、南ベトナム、北ベトナムの間の平和協定が、調印されたことを思い出しました。その後、アメリカはドル価値の大幅な切下げを声明したため、円をはじめ、国際通貨がこの年から変動相場制に移行したのでした。

さらに、その年の秋には、第四次中東戦争がばっばし、石油危機がはじ

この間、東京都をはじめ、皆様のご支援により、第五福竜丸展示館の管理、運営をはじめ、核戦争反対、核兵器廃絶など、平和のために尽力し、ようやく社会的に存在を認めてもらえるようになりました。ここに至るまでの皆様のご好意、ご協力を、改めて感謝いたします。

この頃のことは、前年の一九七二年のことです。これらの歴史をふりかえりますと、十五年前の出来事が、いまだに現在の世界情勢に、色濃く影をおとしていることが分かります。

展示館の参観者は年々増えていますが、最近では和歌山県をはじめ、各地の中学校からの団体見学の急増が顕著です。和歌山県は第五福竜丸の前身、第七事代丸が建造された由緒ある土地です。しかし、そればかりではなく、学校間の連絡がきわめて緊密なため、この県からの見学校の数がずば抜けて高いのではないのでしょうか。他の府県の学校でも、和歌山県にならって、数多く見学に来てほしいものと希望しています。

開館以来の見学者数は、今春までに八十七万人を超え、近く百万人の大台に乗ることと思います。私たちはこれに満足せず、船が語らんとする、人類の未来にとって最も重大な問題に、さらに多くの人が、耳を傾けてほしいと願っているのです。
(第五福竜丸平和協会会長)

協会創立十五周年を祝う

三宅 泰雄

本協会が財団法人「第五福竜丸保存平和協会」として発足したのは、一九七三年のことでした。今年が創立十五周年にあたります。

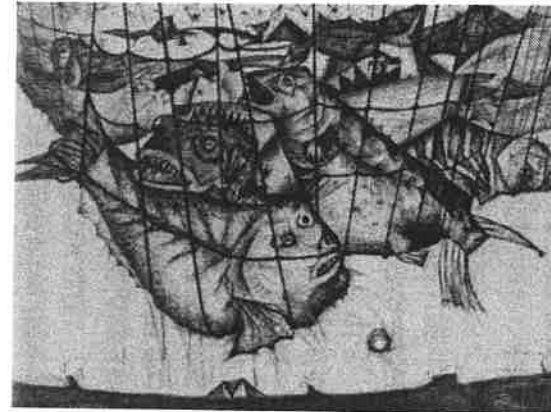
その翌年には、アメリカのニクソン大統領が、ウォーターゲート事件で辞任、日本の田中角栄首相も「金脈問題」で退陣に追い込まれました。田中首相が中国で毛沢東主席と会見、日中国交正常化で合意したのは、前年の一九七二年のことです。

発足当時の本協会役員七人の中でも、すでに理事の広田、神崎の両氏、監事の田中氏が鬼籍に入られました。いまさらに十五年の歳月の重みを感じざるを得ません。

残された私たちは、これらの先達の遺志をつぎ、協会の発展のため、懸命な努力を捧げねばならないと、心に誓っています。

第五福竜丸をとらえる……

作品介绍⑤
池田 龍雄



佐賀県出身の池田龍雄氏(一九二八年)は、十五歳で兵役につき、十七歳で終戦を迎える。戦後

10000 カウント <1954年>

池田氏は、当時を振り返り、「朝鮮戦争で、再び戦争の危機を感じた。絵かきもこのままではと、絵の仲間と共に積極的の外に出ていった」と語る。
一九五〇年代の『立川』



棄てられた魚 (第五福竜丸事件) <1954年>

『アリの町』『内灘』『第五福竜丸事件』『坑口』は、池田氏の二十代の時の作品である。インクで書かれた簡潔な線に若き情熱がほとばしる。板橋区立美術館で、この五月から六月にかけて開かれた「日本のルポタージュ・アート」展の、社会事件とその表現のコーナーに、池田氏の五〇年代の作品が多数展示されていた。

第83回理事会開く
五月三〇日、協会の第83回理事会が学士会館で開かれ、昭和62年度決算・監査報告、事業報告を承認した。
斎藤理事より寄付
三月末、斎藤鶴子理事の夫君孝次郎氏(81歳・元北大助教授・化学)が亡くなられたが、このたび故人の遺志として協会の活動の前進のために十萬円の寄付が寄せられた。
京都から修学旅行
五月につづき六月も京都はじめ修学旅行の中学校の見学がつづく。伏見区醍醐中学校は事前学習の作文集を学級毎に五冊の本にし、千羽鶴と共に寄贈、伏見中学の四百名の生徒も見学後船尾の周りいっぱいになって記念撮影、歓声が館内にこだました。
開設十二周年と地下鉄新駅
六月十日は展示館が開設して十二周年。この日までに通算八万八千九百六十二名の来館者があった。八日には近くに地下鉄有楽町線「新木場」駅が開通(徒歩八分)。来館者は一段と増えるだろう。十一日、十二日と、世界に起る平和の波運動の一環で、大学生協はじめ多くの団体が見学、船を囲んで手結びがあった。

第五福竜丸へ、広島・長崎から

展示館開館十二周年 に寄せて

広島平和記念資料館

広島地にも、毎年多くの国内外の人たち、特に小・中学生、高校生たちが修学旅行として、社会見学として訪れ、20世紀の人類が自らの手によって経験した凄惨な事実を学んでいます。

ヒロシマとナガサキは、核兵器をもって戦う核戦争の惨劇、人類が犯した限りなく大きな禍ちを現在を生きる私たちに伝えています。第五福竜丸ビキニは核実験による放射線被曝の恐怖を教えています。

核実験によって撒き散らされた「死の灰」のため、犠牲者がいたにもかかわらず核実験は取り止められることもなく、その後も、何十回となく繰り返されています。核戦争の恐怖とは別に、ビキニは日常的に行われている核実験等

による放射線被曝の恐ろしさ・危険性を如実に物語っています。

ローマ法王のヒロシマ平和アピールの中に「過去を振り返ることは将来に責任を担うことだ」という言葉がありますが、私たち一人ひとりが戦争の悲惨さを知り、放射線被曝の恐ろしさを知り、多くの犠牲の上に築かれた現在の生活を見つめ直していく必要があると思えます。

ヒロシマ・ナガサキそしてビキニは、単なる歴史の証人ではありません。

人類の未来に対する警鐘であり、戒めにほかなりません。

このように過去を知ることだけでなく、未来を考えるためにも、今後、より重要性を増してくるであろう貴館のますますの御活躍を期待しております。

長崎からのメッセージ

長崎国際文化会館
館長 川口昭彦

長崎に原爆が落とされてから今年で、はや四十三年になります。この間、被爆者の方々も年々高齢化し、被爆の実相を語り継ぐ人々も数少なくなっています。

また、被爆遺構についても同様で、今年の六月には、爆心地の近くにあった山里小学校の校舎も解体され、新しく建て替えられようとしています。こうして被爆の生き証人が次々と姿を消そうとしています。

こうした中で、ビキニ水爆被災の証人である第五福竜丸が、核兵器の恐ろしさ、残酷さを身をもって訴え続けられ、十二年になることに深い感銘を覚えます。

ここに改めて、会長さんをはじめ関係各位の核兵器廃絶に対する地道で粘り強い努力に対し、心から敬意を表します。

長崎市は今年五月十四日に、「核軍縮を求める二十一人委員会」

との協賛で「長崎平和シンポジウム」を開催しました。この中で核廃絶に向けて、今「我々は何をすべきか」「何ができるのか」をテーマに活発な意見の交換がなされました。そこでは、核抑止論の欺まんや危険性を目を向けて、核兵器は絶対悪であることを認識し、その使用、保有、製造は絶対に許されないこと、核兵器をなくす国際条約を作るための世論喚起、非核地帯の設置に向けての努力などを内外に訴えました。

しかし、このシンポジウムで一つだけ残念だったことは、若者の参加が非常に少なかったということです。先日、地元新聞に長崎の戦後世代は平和に対する意識が低いという調査結果が出ていました。戦後世代の人口が日本人の半数を占めるに至った作今、核兵器廃絶の運動は新たな視点が必要になったのかも知れません。

最後に貴館の今後のご発展とご健勝をお祈りするとともに、被爆という共通な経験を持つ福竜丸、広島、長崎が一丸となって、なお一層、核兵器禁止のアピールを全世界に響かせようではありませんか。

平和随想 (七)

三宅 泰雄



最近、新藤兼人氏著「さくら隊八月六日」(岩波ブックレット一一四)を読みました。これは広島で原爆の犠牲となって亡くなった新劇俳優・丸山定夫他、八人のことを書いたものです。新藤氏はこの「さくら隊」の悲劇を映画化するため、戦争中の移動演劇団「さくら隊」が全滅するまでの経緯を調べ、そのあらましを記録したのがこの小冊です。

「さくら隊」の隊員九人(男二人、女七人)は、八月六日(一九四五年)の朝を、広島市堀川町にあった移動演劇聯盟中国支部で迎えました。この建物の持主一家は、すでに疎開し、陸軍の指令で聯盟中国支部に、住宅を貸していたのです。

この建物の主は高野一成といひ、

実は私のまた従兄に当たる人でした。建物は一成の父、一步が建てたもので、二階建の広大な屋敷でした。

一步の妻、よねは私の母の従姉で、幼少のとき父が病死したため、私の母と一緒に、姉妹同様に育てられた人でした。私自身も母に連れられて、毎年のように、広島の高野家に遊びに行ったものです。私の家は、そのころ岡山市にあり、父は第六高等学校の教授をしていました。

高野一步は弁護士として一家をなし、羽振りもよかつたらしく、近所の人は、彼のことを「名は一步、電話は二番、番地は三番」と呼んでいたということです。

息子の一成は明治大学商学部の出身で、私とはきわめて親しい仲でした。この聯盟中国支部には、「さくら隊」のほかに、珊瑚座という移動演劇も同居していました。珊瑚座は七月の末に敵島の存光寺に疎開し、難を免れました。

丸山定夫は、その当時、湿性肋膜炎にかかり、高熱で苦しんでいました。病をおして各地で演劇を続けていたということです。原爆は一挙にして高野邸を粉砕

し、女優の五人は即死、あと四人は命からがら逃げ出すことができました。丸山は宇品港の近くに収容され、そこで珊瑚隊員に見えられて、敵島までつれて行かれましたが、被爆後、十日にして亡くなりました。あとの三人も前後して亡くなりましたが、丸山と同様、ずいぶん苦しんだようです。

私は学生時代、演劇が好きで、築地小劇場の公演を楽しみ、丸山定夫たちのファンの一人でした。その丸山が、広島親戚の家で原爆を浴びて亡くなったことを知り、ひとしおの悲しみと、憤りを覚えたものでした。

広島は私の先祖の地であり、いまでも多くの親類・縁者の住む町です。その中には、原爆で大きい被害をこうむった家も多く、両親と長男を一挙に失った姉妹(小畑家)もあります。この一家は疎開先から一時帰宅したその翌朝に遭難したのです。被爆してから八日目に亡くなった老医師(児玉家)もいます。生き残った人たちも、長い間、大変な苦勞をしいられました。

若いころの私は、元素の人工変換に興味を抱き、とくにオットー・ハーンやリトゼ・マイトナーによる原子核分裂の発見に多大な関心を寄せていました。しかし、これが広島・長崎の原爆となって、数十万の同胞を虐殺しようとは、夢にも思っていりませんでした。むしろ、ギリシャ神話のプロメテウスが「太陽の火」を盗み、二輪車でこんで、人間に与えたように、原子力は「太陽の火」そのものだ、と思っていいたくらいでした。

もちろん、これを武器にすれば、恐るべきものになることは知っていました。また、その研究が進んでいるらしいことも知っていました。だが、まさか短時日のうちに原爆が完成しようとは、少しも考えてはいなかったのです。

或る皮肉な思想家が、「文明とは科学の進歩で、人を長生きさせ、それを一挙に殺してしまうことだ」と呼んでいました。原爆の出現はこの言葉をあらためて、私に思い起こさせました。そして、科学者たちが犯したこの大きい過ちを正すには、私自身もまたプロメテウスにならない、勇気をふるって、人類の滅亡を防ぐために努力しなければならぬと、心に誓ったのでした。



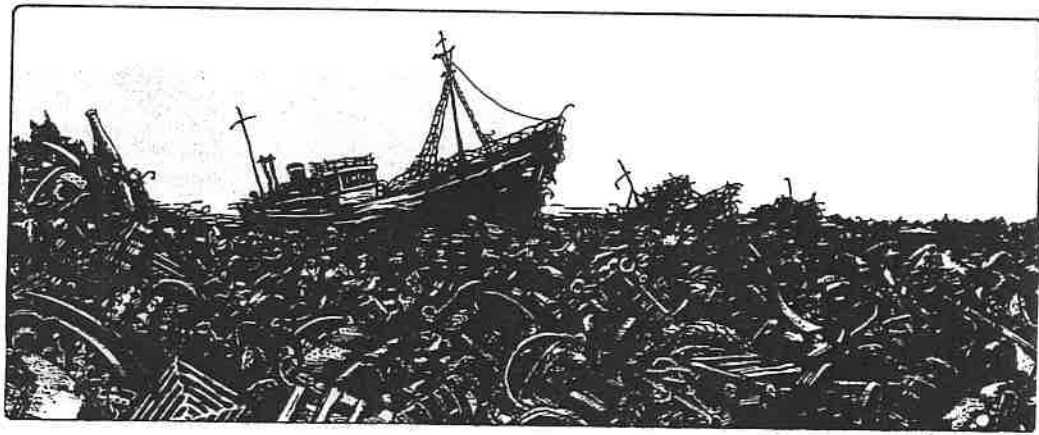
き、第五福竜丸誕生前後の出来事を懐しむように話して下さいました。

私は、南藤さんが話にまじえて動かす骨太の手の指に、時折目をうばわれて

「40年前にその手であの船を造ったのか」と感慨し、当時の光景を想像していました。

まもなく出版される絵本「忘れないで第五福竜丸のおいたち」のための取材ワン・スポットです。

私は、このもの云わぬ声なき被災者第五福竜丸の人生航路を絵本に描きたかったです。そして、何よりも第五福竜丸が△平和の使者▽になっけることを願っております。



たという。祖父だけに限らず、八人の船大工全員が同じおもしろいであつたことだろう。

第七事代丸を造っている時の事について祖父はこの様に言った。

「釘一本打つにしても手つきも運搬船のようなものを造るのとはまた違ってくる。日本一立派なものにしてみせる、必ず大漁する船にしてみせるという欲望がそうさせたのやろう。一本一本その願いをこめて丹念に打ちつけていく。そんな舟大工達の心がこもって造られていったんや」。

そして現在、それが残って大切に保存されている事について「自分自身戦争中に直接被爆とは関係ないんやけれど、呉の港に入った時、あの(広島)キノコ雲を見てその威力については知っているんや。そやから二度と死の灰を見ることのないように、わしらの造った船を通じて本当の死の灰というもの恐しさを知らない今の人達に、平和を願う心あかしとして残してもらわなくてはならないと思ふんや」と聞かせてくれた。(略)

五月、修学旅行で来館した和歌山県の明洋中学三年生の前田家利君の作文の抜粋。おじいさんの前田茂美さんは南藤さんと共に第五福竜丸を造った。

福竜丸の人生航路

画家 赤坂三好



「第五福竜丸は、我が子のような気がする…」

南藤さんは、目を細めて造船所の窓のむこうに広がる南紀熊野灘の海の彼方を眺めながら呟きました。

去年の夏。私は、第五福竜丸の生みの親でもある船大工南藤藤夫さんにお会いして△第五福竜丸誕生▽のエピソードを拝聴し、また地形、風物を見聞したいものと南紀古座をたずねたのです。

南藤さんは、温厚でいかにも実直な船大工さんと言う感じでした。私を心よく造船所の中にまね



■赤坂三好(あかさか みよし) 一九三七年、東京に生まれる。作家の実兄、谷真介との共作が多数ある。銅版画の制作のかたわら、本の装丁、さし絵、絵本に活躍。

一九七三年、一九七五年のチェコBIB世界絵本原画展で、金牌賞を受賞。絵本に「ふえふきとうげ」「あやのねがい」「ど・ど・ど・ど・ど」(金の星社)「かまくら」(講談社)他、多数の作品がある。△「弁慶」(金の星社)より▽

第五福竜丸を建造した祖父の記憶から

前田家利

昭和二十二年三月二十日進水。名は「第七事代丸」。カツオの本釣りで四年連続全国一位の漁獲高を記録する。「戦後の苦しい生活の中であの船を造った事が一番心に残ってる」。僕の祖父は当時の事をふり返りながらそういった。その船こそ、あのビキニ環礁で悲惨な被爆を体験する事になる「第五福竜丸」なのである。祖父もその船を造った八人の船大工のうちの一人であった。

その当時の事について祖父はこの様な感想を述べた。

「わしらのような、運搬船のようなものしか造った事のない者にとっては、船を造るといふことに変わりはないけれども、漁船と運搬船では構造的にまるで違うので一から勉強しなおしやう。中でも設計者の南藤藤夫さんは、わざわざ三重県まで勉強しにいってるとるんや」

昭和二十一年十月に神奈川県にある事代漁業から大型漁船の注文があつた。知らせを聞いた祖父は、必ず丈夫で大漁する船にしたいという希望と、紀州を代表してその様な立派な船を造る事が出来るという誇りで胸はずむおもしろいであつた。